

えひめの歴史文化モノ語り

県歴史博物館資料から ⑭

現在の私たちの暮らしにおいて欠かせることのできるものの中に印(いん)がある。日本で発見された最も古い印は、57年に漢の皇帝が倭国に授けたとされる福岡県の志賀島で見られた「漢委奴国王」の金印である。701年の大宝律令の成立以降、中国の

別名端谷I遺跡の銅印

古代鍛冶工房跡で出土

影響を受け、公式な文書に必要な印の種類や寸法などが規定された。

この時代の印には官印(かんいん)と私印(しいん)があるが、今回紹介するのは今治市別名の別名端谷(べつみやう)はじだにI遺跡の発掘調査で出土した青銅製の私印である。



今治市別名端谷I遺跡出土の銅印(縦3.0㍍、横3.0㍍、高さ3.7㍍)。奈良—平安時代(8～9世紀)。下は印面。県歴史文化博物館保管。歴史展示室1「原始・古代」で展示中

ついでに。ここでは銅印の他にも円面硯(えんめんけん)という古代の硯(すずり)や文字が刻まれた土器が出土しており、識字層の存在がうかがえる。これらのものが見つかったことは、当時、この地域で、役人の管理の下に鉄製品が生産されていたことが推察される。他にも同遺跡周辺では、別名寺谷I遺跡をはじめ、古代の鍛冶炉や製鉄炉が見つかっており、今治平野における鉄生産の中心地であった可能性も指摘されている。

古代の印は、出土品のほ

とが多く、この銅印の「倉正」は、これを所持していた人物の氏名を示している可能性が高いと考えられる。また、別名端谷I遺跡では、古代の7基の鍛冶炉や大型の井戸が見つかっており、鉄製品の生産や加工を専門に行う鍛冶工房が存在していたことが明らかにな

(専門学委員・亀井英希) 随時掲載します